The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞徳永光展著『夏目漱石「心」論』
Author(s)	西尾, 元伸
Citation	語文. 2008, 91, p. 99-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69125
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

徳永光展著『夏目漱石「心」論』

西尾元伸

夏目漱石『心』の研究史は既に膨大なものとなっている。本書は、その膨大な研究文献を、「網羅的」に収集し、文献に軽重なく分析する。そうして研究史を振り返る中で、現状の『心』研究の到達点を捉え、さらに考察を進めようとするものである。

著者は、全編の序にあたる「第一章 本研究の概要」において、「綿密な議論」を目指すことが「作品が曖昧なままにしている問題点」を浮き彫りにすると述べるが、これが基本姿勢となって本書『夏目漱石「心」論』を貫いている。

「第二章 作品論の歴史的展開」「第三章 構造論の到達点と課題」は、作品に倫理を読み取る同時代評から、一九八〇年代には作品論からテクスト論へと展開する様子、現況までを追う研究史論である。渾然とした研究動向から、作品構造を追うことと細部の意味づけ、一人称による語りが内包する主観や空白といった問題に言及する。以上を踏まえつつ、「第四章 作品構成上の諸問題」では、先生が主観で貫かれた遺書の範囲内でしか解釈され得ず、読者にとって曖昧な状態のまま投げ出されるという作品構成上の問題を明らかにする。一方で、先生の妻、静だけが「私」と先生という複数の人間が記録した人物であったことも指摘する。

「第五章 登場人物年齢の確定」は、作品内時間を確定し、作中人物の年齢を復元しようとするものである。「私」や先生と静の年齢に関して様々な考察が行われている。しかし、それでもなお手記を記す「私」の年齢は不明であり、精緻な考証が逆に謎を明確にしてしまうという著者の主張に符合している。さらに、「第六章 青年の過去回顧的意識」は、そうした曖昧さを抱える執筆時点の「私」が言及する〈若さ〉に注目し、視点の置き方次第で解釈が変容する様子を示す。「私」を論じる限界が確認されている。「第七章 青年の自己認識と記述法」は、「私」における東京と郷里という二項対立が、先生のそれに重ね合わせられる状況を論じ、手記に執筆時の意識が混入する様を追う。

「第八章 遺書の意識構造」「第九章 先生の認識と回顧」は、遺書を中心とした先生に関わる問題を論じる。遺書に含まれる論理的矛盾は、執筆という行為そのものが抱え持つ不安定さであり、回想による先生の遺書も恣意性からは免れ得ないと述べ、その執筆意図を自殺正当化のためと読み取る。

本書は、以上九章によって構成されている。全章を通じ、体験時と執筆時の認識の違いを強く意識した論述がなされている。

また、本書には、頁数にして88頁にも及ぶ「参考文献一覧」が付される。著者が『心』という作品のみならず、質量ともに膨大な先行の研究にも真摯に挑まれたことの証ではないかと思われる。『心』を論じようとする者にとっても有意義な一覧となろう。

（風間書房、二〇〇八年三月、三六三頁、六，五〇〇円）

（にしお・もとのぶ　本学大学院博士後期課程）